



吹田市が果たす役割は大きいのに…

国の障害者に対する保健・福祉の予算が削られる中

大型開発予算は膨大、障害者は少しだけ

吹田の障害者問題座談会

(出席者)

- 小川 正明 (さわらび診療所・医師)
- 平形 恒雄 (のぞみ福祉会・統括施設長)
- 鈴木 英夫 (さつき福祉会・理事長)
- 有田 八郎 (吹田市職員労働組合 執行委員長代行)

精神障害者が安心できる場を確保してほしい

有田 本日は吹田市内で障害者医療・福祉に携わっておられる3名のみなさんにお越しいただきました。まず最初に小川医師から「さわらび診療所」の概要についてご説明願いたいのですが。

さわらび診療所は精神科と神経科の専門医院

小川 「さわらび診療所」は、1988年に精神科と神経科の専門医院としてスタートしました。事業内容としては、診療やデイケア、グループホームですね。精神科に特化した医院というのは、当時としては珍しかったのです。現在2人の医師で毎日90人から100人の患者さんを診察しています。1日100人の患者受け入れが限界ですね。診療所の仕事以外にも、総合福祉会館で公的な仕事もこなしていますが、正直、体力の限界を感じますね。

有田 それだけ精神を病む人が増えてきているということですね。精神障害者、そしてその家族にとって、安心してかかれる病院が少



小川 正明さん

ない、というのが大きな問題だと聞きます。小川 精神科の診療圏はかなり広くなります。患者と医師の信頼関係が深まっていけないと治療が成り立ちません。有田 それは障害者に共通する悩みでもありますね。「安心して診てもらえる病院が、身近にあればいいな」という親御さんの声をよく耳にします。

吹田の生保受給者だけでも精神科長期入院者が80名も

小川 障害者医療を充実させてほしいという強い要望、願いがあって、吹田に「あいほうぶ」が誕生しました。しかし「あいほうぶ」も医療機関ではない。運動が実って素晴らしい施設ができた

さわらび診療所は精神科・神経科の専門医院



ました。障害者を取り巻く実際の姿と、厚生労働省が机の上で考えた数字との大きな隔たり。国が福祉を「自己責任」「予算がない」と切り捨ててくる中で、地方自治体の果たすべき役割は大事です。その点、平形さんはここ吹田で長年、作業所を運営されておられますが、

のぞみ福祉会は精神障害者の小規模通所施設

平形 もう20年以上前から精神障害者の作業所を運営しています。当時は精神障害者のための作業所ってほとんどありませんでした。時代が平成になり、精神障害者の存在が社会問題になり、補助金が認められてからは作業所を市内に5か所、グループホームを1か

所、そして生活支援センターを開設しました。4年前に法人の設立が認可され、「のぞみ福祉会」として運営しています。有田 生活支援センターというのは何をするといい場所ですか？平形 相談活動が中心です。精神障害者に対する福祉制度や施設はまだまだ不十分なので、「こういう場合、あなたはこの制度を利用できます」などとアドバイスしながら、相談の中で精神的に支えていくのです。本人からも家族からも多くの相談を受けますね。最近目立つのは、家族の相談で「自分も年をとった。もうすぐ息子や娘の面倒を見るのができなくなる。このままくたばってしまったらいいのだろうか」という悲痛な声です。

しかし通所施設まで足を運んだり、相談の電話をかけてきたりする家族はまだいいのです。問題はなままたく外へ出ない人たち。吹田には精神障害者保健福祉手帳を受けた人は約1000人以上おられるのですが、私たちの施設を含め、何らかの社会的な制度を利用しておられるのは2〜3割。つまり「精神障害者である」と認定は受けているが、何の制度も利用されていない方の家族が圧倒的に多いのです。自宅にこもっておられる障害者が、気軽に安心して利用できる施設と、差別や偏見のない地域社会作りが必要です。有田 「障害者が安心してくらし



平形 恒雄さん

吹田には精神障害者保健福祉手帳が2000人の制度の利用者はわずか2〜3割程度

もう20年前から運営を続けるのぞみ共同作業所



死んだら誰が面倒を…親の悲痛な声